

---

# ドリーム・スナイパー

雨木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドリーム・スナイパー

### 【Nコード】

N3547N

### 【作者名】

雨木

### 【あらすじ】

夢の中の現象を現実にすることが出来る力を持つ青年、幸村誠。ゆきむらまこと

幼い頃に両親を無くした誠は、規模も目的も、名前ですら分からない組織に引き取られた。誠の力を知るその組織は彼の妹を人質に誠に暗殺を強要する。

そんな非日常を日常とする誠にある日幼馴染みの暗殺依頼が届き……。

かなり短い話です。

ちよいとダークな話ですので勧善懲悪のスカッとした話をお求めの方にはオススメしません。

## ターゲット1（前書き）

若干残酷表現が入りますが、リアルな表現は避けていますのであえて警告タグを付けていません。  
あらかじめご了承ください。

反応の如何によってはタグをつけさせていただきますので、その際はご一報下さい。

## ターゲット1

無駄に広い邸内。煌々と点いたままの明かり。

侵入者が纏う黒衣も、夜闇に紛れる黒目黒髪も、ここでは意味をなさない。

照らし出される侵入者の容貌は輝いていた。

少しキツめなつり気味の目。スラリと通った鼻筋。形のよい唇。どれをとっても一級品の造りである。

誰もが認める美形ではあるが、その整いすぎた造りが、逆に冷たさを感じさせる。

青年は時折見かける警備の者を物陰に潜みやり過ごしつつ、目的の部屋へと迷うことなく、着実に歩を進める。

目的の部屋の前に立った青年は、ためらうことなく取っ手に手を掛けた。

そろりと音を立てないように慎重に少しだけ扉を開く。

わずか数十センチだけ開かれた扉からは、室内の煌々と照る光が漏れていた。

音を立てず、開いた隙間に身をよじらせ、スルリと侵入する。そのしなやかな動きは気品ある猫を連想させるものがあった。

標的は昼間のような明るさを苦にすることもなく、ベッドの上でいびきをかいていた。

その傍らに立つと、再び手袋を外して額に触れる。

青年は目を閉じ、少しだけ意識を集中させた。

ダイブ。

そう、意識の中に潜水するイメージだ。

意味のない映像の数々が浮かび、沈み、通り過ぎる。

長年の経験から、これらは脳が必要ないと判断した記憶であると知っていた。

朝起きれば忘れている記憶、キオク棄憶である。

棄憶の海を通り過ぎると、薄い膜の中に放り込まれた。

ぐるりと世界が回る。一瞬で周囲の映像が切り替わり、菜の花畑になった。

青年は切れ長の目をわずかに見開く。表情が少ない彼なりの驚きだ。

意外だった。

屋敷の持ち主は自信家で、嫌みたらしく、なお且つあくどい商売をしている人物と聞いていたからだ。

そのような人物は大抵、欲望に塗れた夢や、良心の呵責に責め立てられる夢ばかり見るのだ。

もしかしたらターゲットは思ったよりも悪人ではないのかもしれない。そんなことを考えていた誠の耳に楽しそうな笑い声が届く。

目を向けると、痩せた老人とその孫らしき少女が楽しそうに追いかけっこをしていた。

真っ白なワンピースに身を包んだ少女は、菜の花に埋もれながら老

人を呼んでいる。

「おじいちゃん、こっち。こっちよ」

老人は可愛くて仕方がないとばかりに目を細め、枯れ枝のような手を孫娘に伸ばす。

逃げる少女。

少女は笑いながらこちらに駆けてくる。そして青年の前まで来ると、顔を懸命に上向かせ、不思議そうに首を傾げる。

「あなた、だあれ」

遅れてターゲットの老人も少女に追いついた。少女の手を取り、慣れぬ青年に微笑みかけた。

「丹崎 源蔵で、間違いないな」

不思議そうに源蔵がコクリと頷く。

「あつ、お花が」

少女が驚いたのは、どこまでも続く菜の花畑が崩壊し始めていたからだ。

「私というアンノウンが侵入したせいだ。脳は繊細で柔軟だ。多少のウィルスやアンノウンであれば、自己に適応させてしまう」

しきりに首を傾げているが、気にせず自儘に話を続ける。  
もとより理解してもらう必要はないのだ。ただ、彼なりのけじめで

あり誠意を示すために説明しているに過ぎないのだから。

「花畑が崩れているのは、私という存在を順応させるために、プログラムを書き換えているからだろう」



## ターゲット1-2

やはり話の意味が分からなかったのだろう。少女は不思議そうな顔で青年を見上げる。

「お兄さんは、だあれ」

先ほどと同じ質問を繰り返す少女に、青年は丁寧に戻す。

「私は、幸村 誠。ドリームスナイパーという呼称の方が聞いたこととはあるかもしれない」

ドリームスナイパーという単語を聞いた瞬間、老人の眉間にシワが寄った。途端に表情が厳しいものになり、目の奥には怯えが浮かんでいた。

「何をしにきたの」

老人の手を握ったままの少女は好奇心いっぱいに問いかける。

「キミのおじいさんを、殺しに」

誠は右手を老人の眉間まで持ち上げた。その手には、いつの間にか銃が握られていた。

そしてあっさりと老人の額を撃ち抜いた。

頭部は原型を留めず、飛び散った脳漿や血液が頬にかかる。

「デザートイーグルか…。丹崎 源蔵、お前の想像力はかなり愉快だな」

まったく愉快そうにもなく言う。

頬を拭うこともせず、無表情のまま少女に照準を合わせた。

少女は怯え、震え、茫然自失 ではなく、どこか投げやりな笑みを浮かべていた。

「防弾チョッキも貫通させる、対熊用の拳銃。それはワシが想像したのか」

声は少女のまま、口調のみが似つかわしくない老人のものとなる。

「ああ、その通りだ。丹崎 源蔵」

真っ白なワンピースに飛散した血からどれだけリアルな臭いがしようと、湿った手触りがしようと、丹崎老人の想像したものに過ぎない。これは丹崎の夢なのだから。

とは言え、単純なる夢として片付けるわけにはいかない。

彼の豊かな想像力に、誠の力を注ぐ。たったそれだけで、夢が現実に影響を及ぼすようになる。

つまり、誠は夢で人を殺すことができるのだ。

「幸村君、と言ったかな。やはりワシは殺されるのか」

最初から知っていたかのような口振りで……。いや、事実自分の所業も、組織への裏切りのリスクも、知り尽くしていたに違いない。

何せ丹崎は、誠の所属する組織の重要なポストを担っていた優秀な人材だったのだから…。

「ああ、殺す。それが仕事だからな」

「そうか。やはり赦してはくれなんだか。あの組織は」

ボロボロと崩れていく世界を見つめながら、丹崎老人は気弱に笑う。

「キミは、何故あの組織にくみする？ 見ればまだ若い。まだ学生だろうに」

不思議そうにというよりは、哀れむように問いかける。  
かすかにその眉根を寄せ、誠は不快を示す。

「……妹を、人質にとられている」

丹崎は内容ではなく、返事が帰ってきたことに対して驚いていた。

「キミは意外と親切だな」

「別に…。死に逝く者には誠実であらねばならない。それだけだ」

「そう。幸村君の妹さんが、無事にキミのもとへ戻って来ることを祈っているよ」

誠は静かに微笑み、

「Good night・baby」

引き金を引いた。

## ターゲツト2

翌朝。目覚めは最悪だった。

きしむ身体に、きしむベッド。立ち上がりカーテンを開けると、いつもと変わらぬ部屋が陽光に照らされる。

質素な部屋というのは少し違つかもしれない。ベッドにテーブル、必要最低限の生活必需品以外は何も置かれていない。モデルルームよりもなお、生活感のない、空虚な部屋だった。

誠は簡単に洗顔を済ませると、学ランを着て部屋を出た。

オートロックの玄関を出るまでマンションの住人とは一切すれ違わなかった。

人付き合いを嫌う誠としては、手間がなくて楽であったが、珍しいこともあるものだ。

何気なくマンションを見上げる。

セキュリティーのしっかりした高層マンション。一介の高校生ごときが一人で住めるようなところではない。組織に与えられた住処だ。

組織が所有するオフィスビルには歩いて十分。駅までは十五分。高校には自転車で二十分。

都内では信じられないくらいの好立地条件である。

そんなマンションをまるまる買い取れてしまう組織の力も、推して知るべし。決して侮れるようなものではない。

学校へ向かう途中、背後から肩を叩かれた。

「ゆーきむらつ。ヤホ」

「香苗……。なに？」

「こらこら。朝からテンション低いぞお」

常からしてテンションの高い幼なじみはきゃらきゃらと笑う。

「幸村の唯一の友人にして、お嫁さん候補の上原 香苗様がせーっかく話しかけてんだから、テンションあげなさいよねっ」

「香苗。友人からお嫁さんって飛びすぎ……」

無表情の誠は、珍しく眉をしかめて返す。が、香苗になんら悪びれる様子はない。

「細かいこと言わないのー」

「細かくない……」

誠の精一杯の反論はいともあっさりと黙殺される。

「あー。それにしても眠い！ こんな天気の良い日は学校サボってお昼寝したくなるね」

「昨日、休みだったのに……寝なかったの？」

「寝たよ。でも夢見が悪くて。最近ずつとなんだよねー」

そう言われれば香苗の目の下にはうつすらとクマが浮いていた。本当によく眠れていないのだろう。

「どんな、夢？」

夢なら誠の領分だ。

本当に怠そうな香苗の様子に、いささか不安になって聞いてみる。

「ん、なんだろ」

言いにくそうに口をもごもごさせる。

「へへっ、忘れちった」

明るく笑ってみせるが、連日眠れないほどの悪夢を忘れるだろうか。

「少しも、覚えてない？」

本人が言いたくないことを無理強いしてまで話させるなど、できようはずもない。とは言え心配なので軽く追及してみる。

「うーん。そうだねえ、追いかけられる夢、かな」

「そう。もっと思い出したら教えて。力に……なれるかどうかかわからないけど、何かはするから」

それだけ言っと、誠は香苗に足並みを揃えることなく歩き出した。誠の後ろ、足を止めた香苗の顔が真っ赤だったことに気づく者はいなかった。

## ターゲット2-2

登校早々、担任からの呼び出し。

内心うんざりしながら一切顔に出さず職員室に向かう。

「おはようございます。お話があると伺ったのですが」

担任は細い目をさらに細めて誠を見た。その目に誠は悟る。

「委員の仕事の話なんだがな」

委員の仕事……。

暗号コードで要人暗殺の仕事の意だ。

「はい……」

「内容はお前に任せる」

殺り方は好きにして良いらしい。

詳細は文書で回るだろう。ソレ以上は十分と判断する。

一礼して担任の前から去ろうとした誠の背中に制止がかかる。

「ああ、そうだ。今回の仕事は大変だからな。上原に手伝ってもらえ」

「香苗に……!?!」

手伝ってもらえ。

イコール暗殺対象は香苗だ。

「なんで、香苗が」

対象なのだ。

香苗が組織に目を付けられた理由は。組織の目的は。……一体何が？

彼女は明らかに一般人だ。父親は中小企業の社長だが、会社はいたって健全なもの。それは組織の資料にあったのだから確かであり、組織自身も認めているはずだ。

ではなぜ、香苗が。よりによって誠の幼なじみがターゲットとなるのか。

「理由などない」

そう。誠は知らなくて良いのだ。理由など。ただ組織の手足となつて働く。

それが誠の存在理由なのだから。

「いいな、仕事は責任もって最後までこなせよ」

責任もって最後まで……。殺ったあとの処理まで任す、か。

香苗を手に掛けた後、誠はどうなっているだろうか。良心に責め立てられているのか。それとも、案外いつものように平然としていられるだろうか……。

誠の望みは……。



再び誠の背中に声がかかる。今度は周りには聞こえぬよう、小さな声で。

「裏切ればお前の妹の命は保証しない」

組織を裏切れない、最大の理由。

「……分かりました。委員に立候補したのは私ですから。最後まで手を抜きません」

一礼をし、今度こそ振り返ることなく職員室を出て行く。

深い闇へとハマっていく。今日の夢は、悪夢だろうか……。

### ターゲツト3

上原 香苗は夢を見ていた。  
そう、夢。ここ数日連続して見るイヤな夢だ。

夕暮れの学校。飽きるほど見慣れた校舎には自分の息遣いと足音のみがこだまする。

何度見ても恐怖が和らぐことなど決して、ない。

「ん……っ！ ハッ、ハアッ……」

夢だというのは分かっているけど足は勝手に進む。懸命に逃げ場を探し、止まることはない。

とつくに体力は限界を迎えていた。苦しげな呼吸音が自分のものだとて、いやに耳につく。正直鬱陶しくて仕方がない。

（体力の無さまで現実と一緒になんて、ヤになっちゃうなあ……もう）

口に出さずに頭の中だけでボヤク。頭は冷静に状況を判断している。なのに心は焦っていた。逃げなければ、と。追いつかれれば自分は殺されてしまうだろうから、と。

厄介なことに体は心の言うことしか聞かない。

あてどなく校舎を駆け回る。

どこに行っても聞こえるのは自分の足音だけ。でも分かる。自分を追いかけてくるものの存在を。

「イヤっ……イヤ、助けて…ッ」

どこまで逃げてもついてくる。だんだん、その気配が近付いてくるのが分かる。

「助けてよ、ゆきむらあ……」

とうとう限界を迎えたらしい自分の脚がもつれ、体が傾ぐ。

恐怖の極みで思い浮かべるのは愛しい人。

口下手で、ぶっきらぼうで、でも誰よりも優しい……幸村。

困っていたり、悲しかったり、苦しかったりするときは必ず……。

「ほら、ね」

「香苗…」

名前を呼んでくれる。。

つんのめった体はたくましい胸が抱きとめてくれた。優しい石けんの香りが鼻をくすぐる。

顔を上げると大好きな幸村のどこかホッとしたような憂い顔。

「大丈夫？ 香苗」

ふるふると首を振る。同時に目尻に溜まっていた涙がキラキラと飛び散った。

泣き顔を見られたくなくて、幸村の黒いシャツに顔を押し付ける。

「ごめん、遅くなって。　　今、悪夢を終わらせる」

そう言つて幸村は私の後ろを見据えた。

私を追いかけてきたものが、その暗闇に潜んでいるのだろう。

出来れば幸村には見られなかった。

こんな、ヒドイ……、幸村を裏切るような夢。

愛しい人の腕の中で、体の向きを変える。暗闇と対峙するように。

コクリと喉が鳴るのと同時に、今まで聞こえなかった追跡者の足音がカツンと響く。

茜色が差し込む廊下に、姿を現したのは　　…。

## ターゲット3-2

「……………オレ、か」

そこに現れたのは、見慣れた制服を着た俺、幸村 誠だった。

腕の中で香苗がピクリと身を震わせた。心なしか、裾を握る力が強くなったような気がする。

不安で不安でたまらないのだろう。そして恐らく追跡者のオレも、この俺も、夢だと思い込んでいるに違いない。

だから、もう…………。

「お休みの時間だ」

片手に香苗を抱えたまま、もう一方の手をオレに向ける。その手にはカッターが握られていた。

「香苗、少し離れていて…………」

「う、うん」

躊躇いながらも香苗は素直に距離をとる。後ろに下がったのを気配だけで感じる。

「それにしても香苗の想像力って…………カッターか」

人を傷付ける道具という指定で具現化させたハズなのだが。

「香苗は人を傷付けるのが嫌いだからな」

手を伸ばしこちらに向かってくるオレに、手を一閃させた。

噴水のように飛び散る血液。そのひと滴が頬にかかる。

香苗は驚きすぎて声も出せないのか、口を覆って床にへたり込んでいる。

頬を拭いてもせず前を見据えた。

喉はぱつくりと割けその呼吸はヒューヒューと風の音がする。それでも尚、オレは歩みを止めない。

自らがゾンビのように練り歩く姿は見ていて気持ちの良いものではないが、せめて目をそらさない。

生死も分からぬ妹のために、誰よりも近しい幼なじみを殺すのだ……。

そんな身勝手な人間の、せめてもの贖いだから。

「ゆき、むら……っ」

固く目をつぶる。まだ、振り向くことは許されない。

目を開くと、すでに手の触れる距離まで近づいたオレがいた。

俺はオレに向かってカッターを突き刺す。右の眼球が潰れ、刃が脳まで到達するイヤな感触が手に伝わる。

「悪夢は、消えろ」  
おまえ

相手の腹を蹴り、反動をつけてカッターを引き抜く。

廊下を滑るように転がったオレはうめき声一つ上げず、ピクリとも動かない。

数秒、見えていても変化はなかった。

いや違う。変化は確かにある。転がっているオレはそのままだが、世界が崩れ始めている。

丹崎の夢に入ったときと同じだ。

今香苗の脳は外部から接触する“幸村 誠”という存在を順応させようとしている。

そのために世界を崩壊させ、その後再構築する。

夢の主以外がこの崩壊に巻き込まれると、意識を取り込まれたまま再構築されてしまう危険がある。

つまり幸村の意識は香苗の夢の中で、体は植物状態になってしまっただ。

もつとも、これは机上の空論であり、実証されている論理ではない。なにぶん夢に潜り込める能力者など前代未聞。幸村以外には確認されていないのだから。

「……………シグナル確認。只今より早急な対処に移る」

建物はボロボロと崩れ、その速度は増すばかりだ。

俺……否、私はターゲットに向き合うように体の向きを変える。

「私の名前は幸村 誠。ターゲット上原 香苗を確認。迅速に任務を遂行する」



### ターゲット3-3

「なに……ソレ。なんなのっ!？」

突然顔面から表情をこっそりと落とした幸村を見て、へたり込んだままの香苗は叫ぶ。

無表情な幸村ならいくらでも見慣れていた。でも違う。そんなんじゃない。

今の幸村からは表情だけでなく感情もこっそりと抜け落ちていた。

「……夢。そうだ、夢だ。いつもの悪夢とちょっと違うけど、これは夢だよね!？」

幸村は持っていたカッターを確認し、刃が折れてしまっていることに気付く。先ほどむりやり引き抜いた衝撃に耐えられなかったのだろっ。

その辺にカッターを打ち捨て、素手でターゲットに向かう。

「確かにこれは夢。だが、起こった決定的事項は現実反映される」

「決定的、事項……?」

「夢の主、ここではターゲット上原香苗を指す。お前が死んだ場合だ」

死に逝く者には誠実に答える。幸村がモットーとしていることに変更はない。

「そつか……私、死ぬんだ」

諦めた風な、受け入れた風な表情で、香苗は幸村を見上げた。

幸村は忠誠を違う騎士のように膝を着く。

「正確には精神の死。肉体は正しく機能するがやがて衰え、緩慢な死を迎える」

「植物状態になるんだ。どれくらい、私の身体は保つのかな」

「個人差はある。点滴や呼吸器に繋いでも、人間の肉体は精神なくば保たない。短ければ明日にも、長ければ十年以上は……」

淡々と語るその様子は、死を一層リアルなものにしている。

「質問は、もういいか」

死ぬ覚悟は出来たか、と暗殺者は問う。

「良くないよつ、まだいっぱい聞きたいことがあったもん。なんで私？ とか、幸村がどうして、とか……」

香苗は両目が決壊しないように必死にせき止めている。

「私、私ね、幸村」

崩壊の迫る世界で、香苗は話し出す。

「ずっと、幸村のことが好きだったよ」

まるで遺言のように静かに語る香苗を幸村は遮らない。  
無情なまでの冷静さでその話を聞く。

「将来の夢は幸村のお嫁さん、ってウソじゃないんだよね。ね、幸村……ううん、まこちゃん」

懐かしい呼び名で呼びかけ直す。

「私、まこちゃんを愛してた。だから、ありがとう。大丈夫です」

優しく決意を込めた笑顔を愛しい人に向ける。

幼く、愚かな愛。

それを受け止めるすべを、幸村は知らなかった。ただ無言で、香苗の首に手をかける。

それにつられ、横たわった体は完全に流れに身を任せている。

端から見ればその重なりあった体は、眠った姫を起こす王子のそれに見えただろう。

「……………」

肺の中の空気を絞り出すように的確に、しっかり首を絞めていく。

「ヒュッ……………」

空気の抜ける音が香苗の口から漏れる。香苗は抵抗することはない。しかしその両目は苦しげに見開き、血走っていた。決して苦しくないわけではないのだ。

「……ごめん、なさい」

小さく、小さくつぶやいたそれは極限の香苗には届くはずがないのに……。

香苗の視線は一瞬だけ幸村と交錯する。

やがて、四肢から力が抜け、完全に動かなくなる。

開かれた目に手を置き、瞼を下ろす。神聖な儀式のごとく、優しい手つきでそれを行った。

幸村は香苗だったものからそっと離れる。

「Good night . Baby」

孤独な殺し屋は優しくつぶやいた。どうか優しい眠りが彼女に訪れますように、と。

もはや、自分と香苗の周りしか残っていない廊下で、幸村は上を向いた。

優しく少し強引な光に引き上げられ、来たときと同様に棄憶の海に放り込まれた。

幸村は気まぐれに、手近にあった棄憶を手繰り寄せてみる。

それは、香苗が見上げた空の景色だったり、一昨日食べた夕食のこ

とだったり……。

何気ない普通の記憶だった。

そして気付く。どうしようもない違和感に。

「俺との記憶が棄憶にない……？」

驚愕に目を見開く。

どんな些細な会話でも、その姿も、幸村が映っている棄憶はなかった。

それは詰まるところ、忘れたくないほど大切な記憶であったのだ。

「ねえ、香苗。なんで俺の答え、聞かなかったの？」

一方的に愛を伝えて逝った香苗。

同じだけの愛を求めなかった香苗。

棄憶を抱きしめて頬を寄せる。

「香苗、俺は香苗が大切だった」

きつと、彼女は分かっていたのだろう。幸村の心が、

「誰よりも大切な友人だったんだ」

自らにないことを。

## ターゲット4

目を開けると始めに見慣れぬ部屋が目に入った。うつすらとぼやける目を擦りつつ、焦点を合わせた先には眠る香苗がいた。

その変わらない健やかな寝顔は、とてもでないが精神の死を迎えた者には見えなかった。

それどころか、今にも起きそうなほどだ。

「……………」

その頬に手を延ばしかけ、止めた。

夢にダイビングする際、額に触れるべく外してあった黒の皮手袋を着け直す。

そしてその場を後にしようと背を向けた。

死体（抜け殻）の処理は俺の自由だと言われている。そのままにしていた所で責められまい。

朝になればきつと香苗の両親がその異変に気付くだろう。

夜明けまであと数刻。

幸村は音も立てずまだ闇の残る外界へと飛び出した。

いつもの通学路。

ちらほらと見える学制服は一樣に学校を目指す。

慣れた道を幸村は漫然と進む。

校門まであと数十メートル。いつもであればこの辺りで挨拶とともに肩を叩かれていた。

そんなことを考えてると、本当に肩を叩かれる。

“ ゆーきむらっ、ヤホ ”

勢い良く振り向いた先には、少し驚いた風な担任がいた。

「幸村、おはよう」

もう有り得ないことなのだ、と頭を振って幻影を消す。

「おはようございます」

「そうだ幸村、委員の仕事は無事終わったか？」

ターゲットである上原香苗を無事に処理できたか、と組織の監視者は問う。

「……はい」

そういえば、昨日は組織に連絡を入れていなかった。

いつもであれば仕事が終われば直ぐに、その足で組織のビルへと向

かっていたものだが……。

なるほど、意外と自分は気が動転していたらしい。

「すみません。連絡、入れ忘れてました」

「そうか。次からは気をつけるように」

「はい」

それだけ言つと担任はさっさと言つてしまふ。その背に心の中で問いかけた。

ねえ、俺は壊れているの？

香苗が居なくなったことを確かに悲しんでいる。

その反面、香苗の命と引き換えに引き延ばされた妹の命にホツとしているのだ。

もう永らく会っていない妹。両親が亡くなり、組織に引き取られてから八年が経つ。その間、あの子に会った回数はゼロ。

手紙ですら自分たち兄妹を繋ぐものはない。

始めこそ幸村は妹に手紙を渡すよう仲介者に頼んでいた。しかし返事がくることは決してなかった。

そして次第に幸村は手紙を送らなくなった……。

生きているのか、死んでいるのかも分からない唯一の肉親を守るために幸村は人を殺し続けている。



今再び妹と再会してもきつと分らないだろう。

八年。決して短くないその年月は、写真もない妹の顔を忘れるには充分過ぎた。

そのことを考えれば、家族同様に過ごした香苗の方がよほど親しいと言える。

なのに幸村は家族を選んだ。

（俺は、壊れている……）

過剰なまでの歪んだ家族愛。

幸村は自嘲の笑みを浮かべ校門をくぐる。

門はまるで、戻ることの出来ない道へといざなうように優しく幸村を呑み込んだ。

朝日は儚げに道を照らす。

せめてその先に、わずかばかりの安息があることを祈って……。

## ターゲットEND

香苗の机が持ち主を得ないまま、二ヶ月が経とうとしている。

ホームルーム前の騒がしい教室で幸村はただ空を眺めていた。

視線の先では、どんよりと重苦しい空を一羽の鳥が滑空している。

鳥は二、三度翼をはためかすと、風に乗ってどこかへと飛び去ってしまった。

行方を見送ると、幸村は主の帰りを待つ隣の机へと視線を移した。

「……………」

しばらくそうしているといつもと変わらぬ様子の担任が入ってくる。その後ろには見知らぬ制服を来た女子生徒が一人。

さっきまでざわめいていたクラス内がシンと静まる。

「全員席つけ」

その命令に珍しくブーイングが出ることなく、すぐさま全員が自分の席についた。

そうして俯き加減の彼女を見ようと皆が体を乗り出している。

そんな中幸村は一人茫然としていた。

血が騒ぐ。

危険信号が血液よりも速く、体中を巡る。

「見て分かるように、彼女は転入生だ」

すぐさまここを逃げる。逃げ出せ。

本能が告げる。

「それじゃあ自己紹介を」

「はい」

鈴を転がしたような可憐な声だ。男子たちのボルテージが上がる中、幸村は一人固唾を飲む。

「志木 豊です。不慣れなうちには何かと迷惑かけると思いますがよろしく願います」

そう言って俯いていた顔を上げた彼女は、笑った。

艶やかな笑みに誰もが目を奪われる。

担任に指示を受けた彼女は香苗の席へと歩き出した。

その席に座り、彼女はこちらを見た。その見覚えのある黒耀の瞳を吸い込まれるように見入る。

「こんにちは」

はじめましてではない、こんにちは。

懐かしい彼女の姿を俺は忘れていなかった。

ああ、そうか。これが、俺への報いか……。

「うん、こんにちは。豊」

お帰り。俺の愛しい妹。

艶やかな笑みを浮かべる豊を見て幸村は悟る。今夜は間違いなく悪夢を見るのだろう……と。

もう戻れない深みへと、悪夢が優しく誘う  
…。

Good night・Baby

～END～

## ターゲットEND（後書き）

完結です！

いやはや素晴らしいまでに中途半端ですね。

続き……考えていないことはないのですが、今書いている長編が完結しない限りあり得ないただけ申し上げましょう。（それ以前に需要はあるのかという話 笑）

ということまで最後までお付き合い下さった方々には雨木から惜しみない感謝を申し上げます。  
ありがとうございました。

雨木 拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3547n/>

---

ドリーム・スナイパー

2010年10月9日12時34分発行